二月宝生会　月並能

二月九日（日）
午後二時始

開場　十三時
於　宝生能楽堂

演目の解説

能「難波」（なにわ）

熊野詣でを済ませた臣下が摂津の難波の里へ帰って来ます。そこへ若い男と、老人が現れ、梅の木の周りを掃き清めています。老人は名木である難波の梅の木のこと、仁徳天皇の仁政のことなどを語り、我こそ「難波津」の歌を詠んだ百済国の王仁であると明かして去って行きます。その夜、梅の精「木花咲耶姫」と王仁が現れ、華麗な舞と重厚な舞楽を舞って、共に天下泰平を祝福します。

狂言「佐渡狐」（さどぎつね）

佐渡の国の百姓と越後の国の百姓が、領主に年貢を納めに行く途中で道連れになり、佐渡に狐がいるかいないかの論争になります。二人はそれぞれの一腰（ひとこし＝刀）を賭け、役人の奏者に判定を頼むことにします。先に年貢を納めに入ったことにした佐渡の百姓は、実は狐納めに見たことがなかったので、奏者に賄賂を渡しその形や色を教えてもらいます。いざ判定のため、二人揃って奏者の前に出ると……。

能「錦戸」（にしきど）

源義経は平家を滅ぼした後、兄頼朝と不仲になり、奥州の藤原秀衡を頼って身を寄せていました。ところがその秀衡の死後、長男錦戸太郎は頼朝の意を汲み、義経を討つ事を決心し弟泰衡とも同心して、三男泉三郎を説得するため屋敷にやって来ます。三郎は親の遺言を盾に兄達に反対し、錦戸は怒って帰ってしまいます。母からの文で兄達が攻めて来る事を知った三郎は、妻を自害させた上で、自宅で奮闘しますが、最後には捕えられてしまいます。

14:00　難波

天女　今井　基
ツレ　小倉健太郎
シテ　今井泰行

ワキ　殿田　謙吉
ワキツレ　則久　英志
〃　梅村　昌功
間　能村　晶人

大鼓　安福　光雄
小鼓　鵜澤洋太郎
太鼓　桜井　均
笛　一噌　隆之

後見　三川　淳雄
朝倉　俊樹
佐野　玄宜

地謡　朝倉　大輔
金井　賢郎
亀井　雄二
小林　晋也
大坪喜美雄
小林与志郎
登坂　武雄
東川　光夫

16:00　佐渡狐

野村　萬

野村万之丞
野村　万蔵

〈休憩十五分〉

16:45　錦戸

〃　佐野　弘宜
〃　當山　淳司
〃　藪　克徳
〃　澤田　宏司
立衆　和久荘太郎
ツレ　水上　優
シテ　金森　秀祥

ワキ　大日方　寛

大鼓　柿原　弘和
小鼓　幸　信吾
笛　小野寺竜一

後見　宝生　和英
山内　崇生
辰巳大二郎

地謡　金森　隆晋
東川　尚史
高橋　憲正
大友　順
藤井　雅之
佐野　由於
金井　雄資
辰巳満次郎

終演予定　十七時三十五分頃

次回予告

二〇二〇年三月八日（日）
十四時始

誓願寺　亀井　保雄
来迎拍子

弱法師　登坂　武雄

文化庁文化芸術振興費補助金
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

二月五雲会

二月十五日（土）
午後十二時始
開場　十一時
於　宝生能楽堂

演目の解説

能「弓八幡」（ゆみやわた）

後宇多院に仕える臣下が勅命によって山八幡宮に参詣します。初卯の祭りを伴い、弓を錦の袋に包んだ老人が現れ、これを帝へ捧げ物と言い、袋かへの弓とらを出すと渡しまし、桑の弓を治る臣下を制しの、こと世にをうた神代の納めるの語蓬の矢にて平しの世に弓は自不要なのだ説明しますと説泰ら八幡の神末社る

狂言「舟船」（ふねふな）

西ノ宮へ遊山へ出掛ける事にした主人と太郎冠者は、神崎の渡しで舟に乗る者が遠くに停泊しているが、ふるしまにし向た。人かはい（ふなね）やーい舟主太郎冠者は、船頭（ふなね）古歌を呼び太郎冠者は今発展歌を引用し、船主に示しまます。人は舟（ふなね）と指だかしとら主人と詠む者で、正しく昔張しまます。主人は船頭（ふなね）歌を張り、と太郎冠者がしは船主に張ます。主人と太郎冠者がいと船主

能「胡蝶」（こちょう）

吉野の山奥から京へやって来た僧が、一条大宮で折れ眺めて、いろいろ咲き誇る梅を木に現れ、女が声をかけると、美しい女と思い自分は不審に尋ねると、花に戯れ、蝶が化身して四季折々の草花に戯れ、身の縁ながら春の咲く梅に、僧が出あるが、僧は唯一早花の功徳で、来て僧と遂に夢と言う梅の花の美しい花に出会えた蝶に現れた

能「是界」（ぜがい）

天狗の首領は、是界坊は、道引かねの国で魔界坊道に込もがあるの首領で、きうと日本を魔界坊は、心の天狗の首領あるの太郎坊を決ねて、太郎坊ねて訪ねて、是界坊の比叡山の比叡坊を庵室で自ら出て、太郎坊は申し協力を申室で自ら出て、坊太郎坊は比叡山の比叡坊に襲いかかず日を語り、天台山の御坊に襲いかかず日を語り、天台山の御坊に襲いかかず日を語り、天台山の御